

3 「第44回 全日本教育工学研究協議会全国大会川崎大会」 夢！希望！かわさき！未来社会を切り拓く資質・能力の育成

- (1) 日時 平成30年11月9日（金）～10日（土）
- (2) 場所 カルッツかわさき（川崎市スポーツ・文化総合センター）
- (3) 研修会内容

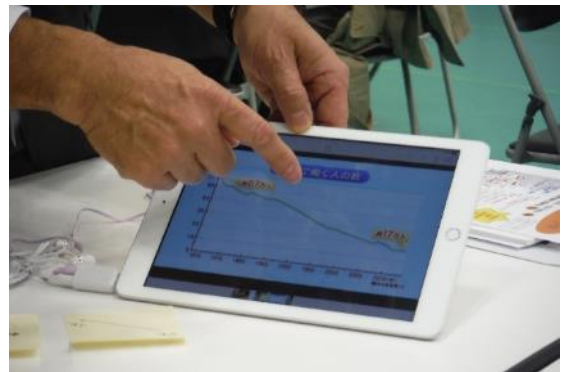
① 公開授業 川崎市立旭町小学校

公開授業では、タブレット端末や実物投影機、電子黒板などを効果的に活用し、主体的・対話的で深い学びが実現できるように工夫されていた。タブレット端末のカメラ機能を用いて、児童の授業中のノートを撮影し、大型テレビに映したり、プリントアウトしたりすることで、多様な意見や考え方に触れることができていた。また、外国語活動の授業では、デジタル教科書から、英文やチャンツを音声として聞くことができ、個々の学びに応じてネイティブの発音に触れることができていた。これらの機能は、従来のアナログではできなかったことであり、ICT機器活用の可能性が示されていた。



② ワークショップ

夏の視聴覚・情報教育研究会で講師にお招きされた山口眞希先生（金沢市大徳小学校）が担当されていた「ICTを活用した主体的・対話的で深い学びを実現する授業力の育成」に参加した。参加者を児童と見立て、小学5年生社会科「食料生産」の単元の模擬授業を行った。ジグソー法を用い、タブレット端末でそれぞれが異なる動画を視聴した後、分かったことをグループで伝え合い、食料生産の課題について考えていった。3つのそれぞれ異なる「NHK for School」の動画クリップを、3組に分かれて視聴することで、全員が積極的に授業に参加する必然性があり、主体的・対話的で深い学びが実現できるよう工夫されていた。タブレット端末やWi-Fi環境を整備する必要はあるが、ICT機器の良さと、従来の学習法の良さをうまく融合させており、ICT機器を有効活用した授業の方向性を見いだすことができた。



③ 研究発表

プログラミング教育に関する発表を中心に聞いた。新学習指導要領完全実施に向けて、様々な先行的な試みがなされていた。プログラミングソフトの操作に時間が掛かると、教科のねらいが達成できず、プログラミング自体が主な活動になってしまう恐れが懸念されていた。教科のねらいに合致した内容をどの時間に実施するか、機材などの環境をどのように整えるかなど、2020年度に向け、早急に取り組むべき課題が多くあることが分かった。文部科学省が策定した「第3期教育振興基本計画」、「教育のICT化に向けた環境整備5か年計画（2018～2022年度）」、「小学校プログラミング教育の手引（第二版）」などで示された指針をもとに、早急に取り組んでいく必要があると思う。